

初期茶山詩における『文選』の影響について

山岡 萬謙・谷本 圭司*

岡山理科大学工学部

*広島大学大学院

1. はじめに

菅茶山のテキストとしては、『黄葉夕陽村舎詩』が知られ、これに基づく選訳や研究がなされてきたが、広島県竹原市の頼家に写本『白沙翠竹村舎集』が所蔵されており、それは『黄葉夕陽村舎詩』前編巻一～三及び後編巻一に収録されている五言詩と七言古詩の一部、及びこれまで知られていなかった詩をあわせて百二十四首の詩を記したものである。配列は編年によらず、五言詩六十首・七言古詩六十四首を詩体別にまとめて並べており、その下限は天明六年（一七八六）茶山三十九歳までで、現存する最初期の茶山詩の資料と考えるとよいと思われる。

この写本『白沙翠竹村舎集』は、『黄葉夕陽村舎詩』前編巻一に収録されている古今体詩百四首のうちの五言詩と七言古詩二十五首のうち、「春日雜詩其一」と「送家弟信卿從西山先生讀書」を除く二十三首を含み、同時に、広島大学頼棋一教授の「菅茶山の安永九年『北上日記』」（広島大学文学部紀要第三十二巻一号 一九七三所収）に記された詩三首を含んでいる。しかも、『黄葉夕陽村舎詩』に互見の詩については、特に前編巻一に収録された詩に字句の異同が多く見られるのである。以上の事から、最初期の茶山詩を研究する資料として、写本『白沙翠竹村舎集』は非常に重要なものと考えられる¹⁾。

ところで、茶山の詩風についての評価として、南宋詩を祖述するもの、叙景的な温雅な田園詩を中心とするものという理解が一般的であった。しかし、近年福島理子氏は、まず「有鳥三首—聖護院村塾時代の茶山」（大阪藝文研究『混沌』第十二号 混沌會 昭和63年）において、西山拙斎との関係から、白居易の政治批判詩からの初期茶山詩への影響を論じて、初期の茶山詩に露骨な政治批判が見られることを指摘され、さらに「茶山風の形成—混沌社社友と菅茶山—」（近世文芸51 平成元年）において、茶山の詩風の転換について論じられ、「明和より安永期、那波魯堂門下にあつて、聖護院近侍の儒者らと詩作を共にしていた当時の彼の詩風は、世情の退廃を憂い、自らの理想の容れられぬ激しい焦燥を歌い込めたものが多く、依然として古文辞風の名残りを払拭してはいなかった」と指摘されている。また、黒川洋一氏は六如と茶山について「六如と茶山の二人は、江戸後期を代表する二人の詩人であるといつてよいが、一人は硬質なことばを連ねて特異な題材を好んでうたい、一人は平易なことばをもって、日常卑近のことがらを題材としてうたう点において、

中唐の韓愈と白居易に似ている。韓愈と白居易がその詩の性格を正反対にしながらも杜甫を父とする双生児であったように、六如と茶山とはまた詩の性格をことにしながらも、同じく杜甫を父とする詩の双生児であったとわたしは考えている」と結論づけられる一方で、「茶山の五十歳ごろまでの詩を収める『前編』の詩は宋詩的であるよりも、むしろ漢魏の詩に似るとさえ思われる」と述べておられる²⁾。

以上、茶山の青年期・壮年期における詩についての指摘のうち、特に黒川氏の「漢魏の詩に似るとさえ思われる」という指摘は、注目すべきである。なぜなら、写本『白沙翠竹村舎集』に録された詩における語彙に、『文選』に収録されている作品の語彙を用いた詩句が多く見受けられるからである。もちろん、それらは単純な重複語彙が多いということではない。茶山が詩を作るにあたって、『文選』所収の作品中の表現を意識した例が、従来言われてきた宋詩に比べてかなり多く、福島氏・黒川氏の指摘される白居易・杜甫に比べてもそれに匹敵するほど見受けられるということである。以下、写本『白沙翠竹村舎集』中の実例を取り上げながら、考察を加えることにする。

なお、紙幅の都合もあるので、取り上げる実例は、多く見受けられる「政治批判に関するもの」、一般的な茶山評価に関連しての「自然描写に関するもの」、及び若き日の茶山が主として人との関わりにおいて「心情を示したもの」を取り上げる〔なお、写本に録されていて、「黄葉夕陽村舎詩」には収められていない作品には◇、『黄葉夕陽村舎詩』にも収められているが、詩題が異なる場合は◆で示すことにする。なお、写本、刊本に互見の詩において、字句に異同のある場合はその箇所を下線を引いて示した。〕

2. 政治批判に関するもの

『白沙翠竹村舎集』中の茶山の詩句に、『文選』中の作品の表現がどのように反映しているかを調べて、最も目立つのは政治批判（世情に対する憤懣を表現する語彙を含む）に関する語彙である。そのうち、特徴的な表現として指摘できるものを便宜上二つに分けて挙げてみる。

a 世情に関するもの

「街談」 看他朝野風，不似舊時淳。街上談何事，低声互訴冤。（◇歎齊）

張衡「西京賦」「若其五縣遊麗，辯論之士，街談巷議，」

「繞指柔」 曾聞昆吾鉄，精剛無匹儔。如何隨時世，翻成繞指柔。（十咏物・劍）³⁾

劉琨「重贈盧諶一首」詩「何意百鍊剛，化爲繞指柔。」（『文選』卷25）

「素練」 織煙能爍山，素練固可緇。（十咏物・絲）⁴⁾

陸機「爲顧彦先贈婦二首」其一「京洛多風塵，素衣化爲緇。」（『文選』卷24）

「言遜」 言遜古所誠，直声今所惡。（◇「答西山子雅」）

杜預「春秋左氏傳序」「黜周而王魯，危行言遜，以避當時之害。」(『文選』卷45)

「豫慮」 世態日遷轉，豫慮多不違。往事既如此，來日亦可知。(◇雜詩六首其四)

賈誼「鵬鳥賦」「天不可豫慮兮，道不可豫謀。」(『文選』卷13)

「遷轉」も賈誼「鵬鳥賦」「萬物變化兮，固無休息。幹流而遷兮，或推而還」の五臣（李周翰）注に，「萬物變化，遷轉反復無定。」と見える。]

「浮雲」 浮雲滿天地，我心枉傷悲。(◇雜詩六首其四)

群情各有執，貞士固身窮。仰瞻浮雲聚，否塞曷云通。(◆奉贈西山先生 五首其二)⁵⁾

滿眼浮雲幾萬疊，誰破冥濛仰嬋娟。(◆中秋三宵無月呈子雅先生)⁶⁾

「白日」 白日不見山，燕雀來相欺。(◇「答西山子雅」)

城中王侯第，多作狐兔墟。城南千家市，茫、枳棘蕪。四顧曠無人，仰見白日徂。遠道與誰偕，一步一歎歎。(流民圖三首其一)⁷⁾

苞苴白日爭豐美，權門黃金聳丘山。(◇古齊謳行)

「古詩十九首」其一「浮雲蔽白日，遊子不顧反。」(『文選』卷29)

[李善注] 浮雲之蔽白日，以喻邪佞之毀忠良。故遊子之行，不顧反也。…。古楊柳行曰，「讒邪害公正，浮雲蔽白日。」義與此同也。

…。

b 悪人のはびこることを比喩的に表現するもの

「豺虎」 富歲人相食，豺虎正聯榮。(◇雜詩六首 其一)

王粲「七哀詩」其一「西京亂無象，豺虎方遘患。」(『文選』卷23)

[李善注] 班固『漢書』張耳・陳餘傳述曰，捩國爭權，還為豺虎。]

[五臣（劉良）注] 豺虎喻羣賊貪暴害人也。

「夜蟲」 夜蟲不疑日，斯言誠可悲。(十咏物・燈火)⁸⁾

干寶「晉紀總論」「於是輕薄干紀之士，役姦智以投之，如夜蟲之赴火。」(『文選』卷49)

「翱翔」 怪禽生信陽，移止富山傍。毛羽鮮彩色，音響頻笙簧。一舞嘲孔雀，一鳴笑鳳凰。衆鳥驚且悅，相從日翱翔。(◇贈肥後藪子厚三首其二)⁹⁾

「離騷」「鳳凰翼其承旂兮，高翱翔之翼翼。」(『文選』卷30)

「食殘」 鳥噪雀躍事食殘，鸞形鳳質不足觀。(◇瑞禽行，有感而作。)

陸機「五等諸侯論」「則食殘之萌，皆如羣后也。」(『文選』卷53)

「鸞鳳」・「鷓臯」・「和鳴」

鸞鳳無儔匹，孤立誰和鳴。鷓臯多種類，羣鶩相喧争。(◇雜詩六首其三)

賈誼「弔屈原文」「嗚呼哀哉，逢時不祥。鸞鳳伏竄兮，鷓臯翱翔。闒茸尊顯兮，讒諛得志。」(『文選』卷60)

[李善注] 胡廣曰，闒茸不才之人。無六翮翱翔之用，而反尊顯，諂諛得世於志也。

[五臣注] (李周) 翰曰，鸞鳳喻賢人也。鷓臯惡鳥也。喻讒人也。

「鳩毒」 鳩毒耽宴安，鳥喙救飢饉。(十咏物・藥)¹⁰

鍾會「檄蜀文」「豈宴安鳩毒，懷祿而不變哉。」(『文選』卷44)

これらの例から、初期の茶山の表現には二つの傾向が指摘できる。一つは、世情の退廃を「浮雲」と「白日」との関係から表現する傾向であり、いま一つは、鳥を奸物に喩えることである。しかしながら、この二つの傾向は厳密に使い分けられているわけではない。「白日不見山，燕雀来相欺。」(◇「答西山子雅」)の例のように、密接に関係づけて表現された例も存在する。

もっとも、世情の退廃を「浮雲」と「白日」との関係から表現してあるからといって、単純にこれを『文選』からの影響とするにはやや問題があるとする向きもあるであろう。「浮雲」・「白日」は世情の退廃を表現する際に、かなり常套的に用いられる語彙であり、『文選』の「古詩十九首」に基づいて、後の詩人たちもこれを使用しているからである。しかし、「世態日遷轉，豫慮多不違。」(◇雜詩六首其四)の例が、賈誼の「鵬鳥賦」の本文とそれにつけられた五臣注によって導き出された表現であり、茶山が『文選』とその注文を把握していたことが明確に見取れる以上は、それが『文選』の「古詩十九首」を直接に意識して表現されたものであると考えてよいと思われる。また、「苞苴白日争豐美，樞門黄金聳丘山。」(◇古齊謳行)の例は、対句として考えた場合、「白日」―「黄金」を対とすることにやや無理があると感じられるものであるが、これも「古詩十九首」を下敷きにした表現であると考えれば、世情の退廃という点で二句のまとまりを見いだすことができるのである。

次に、鳥を奸物に喩える傾向についてであるが、これに関しては既に福島理子氏が「有鳥三首―聖護院村塾時代の茶山」(大阪藝文研究『混沌』第十二号 混沌會 昭和63年)に指摘されている。福島氏は茶山の「有鳥三首」¹¹⁾を取り上げて、この趣向が元稹の「有鳥二十首」及び白居易の和詩を伴った「大鶩鳥」詩に基づくものであらうとされ、元稹・白居易らの風論の精神を紹述しようとしていたと述べておられる。もちろん、「有鳥三首」における全体的な描写や作者の寓意が暗黙のうちに理解される形式について、福島氏の指摘される元稹・白居易の影響は明確であり、ここに敢えて異を唱えるものではない。ただ、

福島氏はその論文中で、この趣向を西山拙斎との関わりにおいて論じられた際に、拙斎の「義鶻行」と杜甫の「義鶻行」を取り上げるのみで、それ以前の例に言及しておられないので、それを補う意味もあって『文選』所収の作品からの例をここに取り上げることにした。

奸物を鳥に喩える例として、注目すべきは「鸞鳳無儔匹，孤立誰和鳴。鷓鴣多種類，羣鶻相喧争。」（◇雑詩六首其三）の例である。これが賈誼の「弔屈原文」の一節を踏まえた表現であることは、既に示したとおりであるが、ここに使用された語彙で「鸞鳳」→「和鳴」という例が、嵇康の「琴賦」に「遠而聴之，若鸞鳳和鳴戲雲中」（『文選』巻18）と見える。さらに、「儔匹」についても、樂府古辭「傷歌行」に「春鳥翻南飛，翩翩獨翱翔。悲聲命儔匹，哀鳴傷我腸」（『文選』巻27）とあるのが意識されているのは明らかであるように思われる。むろん、「相喧争」は杜甫の「縛雞行」に「小奴縛雞向市賣，雞被縛急相喧争」と見えるが、この四句に一貫する内容を考えると、『文選』に収録されている作品の表現をふまえて、茶山詩の表現が成立していることは明白であろう。

また、「世態日遷轉，豫慮多不違。」（◇雑詩六首其四）のように、世情の退廃を嘆く表現に使用される語彙が、賈誼の「鵬鳥賦」に基づくという例もある。おそらく、茶山は「鳥」を比喻として風論の精神を表現するにあたって、様々な作品からその表現のヒントを得たに違いあるまい。その際、茶山にとって『文選』は重要な参考書のひとつであったと考えられる。

3. 自然に関するもの

茶山の詩は、一般に田園詩がよく知られている。『白沙翠竹村舎集』中にもいわゆる叙景の詩、及び叙景部分を含む詩は多いが、『文選』中の作品の表現を意識したと思われる例はたいていなく、その数は意外なほど少ない。しかも、その多くは、

- 「嵯峨」 主人雅興耽咏歌，倚欄時望碧嵯峨。（木村氏迎翠樓同伯協賦）¹²⁾
班彪「北征賦」「躋高平而周覽，望山谷之嵯峨。」（『文選』巻9）
- 「長蘿」 時方梅雨晴，垣墻長蘿鶯。（◇至樂居，分「楊柳風前笑語香」句為韻。得笑字。）
孫綽「遊天台山賦」「攬樛木之長蘿，援葛藟之飛莖」（『文選』巻11）
- 「丹崖」・「翠屏」
鹿柴臨丹崖，魚梁倚翠屏（◇金澗）
嵇康「琴賦」「丹崖嶮巖，青壁萬尋」（『文選』巻18）
孫綽「遊天台山賦」「踐莓苔之滑石，搏壁立之翠屏」（『文選』巻11）
- 「孤嶼」 我亦發孤嶼，舍輿步平坡。（◇人日自笠岡還）
謝靈運「登江中孤嶼」「亂流趨正絕，孤嶼媚中川」（『文選』巻26）

などが挙げられるといったような、単純に語彙をそのまま借りて使っただけであろうと判断されるものである。しかし、『文選』中の作品の表現を意識したと思われる例として以下のような例を見いだすことができる。

「清風」 清風吹衣袂，郊夜寂寥。(雜詩)¹³⁾

阮籍「詠懷詩十七首其一」「薄帷鑑明月，清風吹我衣」(『文選』卷23)

「佳麗地」洛城佳麗地，山水鬱□□。(寄紀州西山子綱)¹⁴⁾

謝朓「鼓吹曲」「江南佳麗地，金陵帝王州」(『文選』卷28)

「朝嵐」・「夕暉」

又謂俗客日團欒，朝嵐夕暉未暇看。(木村氏迎翠樓同伯協賦)

「翠嵐」熊館昏白日，人家罩翠嵐。(◆三月八日，燧嶺，歷柁山及菅山，抵平村，翌日，歷三郎・父石諸村，還安井村，途中作 三首其一)¹⁵⁾

謝靈運「晚出西射堂」「連鄣疊巘嶒，青翠杳深沈。曉霜楓葉丹，夕曛嵐氣陰」(『文選』卷22)

「出岫」孤巘向人如有意，片雲出岫竟無心。(木村氏迎翠樓同伯協賦)

華山之孫醜而文，崖留冰雪岫噴雲。(姬井仲明，得一石於中原洲，以為盆山。峯勢峻立，有穴在半腹，迂曲而幽深，蓋尤物也。且以中原乃烈公遊憩之處也，珍襲持至，命予詩之。)¹⁶⁾

「倦鳥」佳遊知何屢，日入猶盤桓。倦鳥投遠林，牧童返孤村。(◇雄神川，同長伯圭，釣魚尋石，一無所得。)

陶淵明「歸去來辭」「雲無心以出岫，鳥倦飛而知還。景翳翳以將入，撫孤松而盤桓」(『文選』卷45)

「媚晴漣」松江萬家水為郭，粉壁閃爍媚晴漣(碧雲湖吟。送道光上人之雲州)¹⁷⁾

謝靈運の「過始寧墅」「白雲抱幽石，綠篠媚清漣」(『文選』卷26)

しかしながら、これらの例を見て、自然描写・風景描写について『文選』中の作品の表現を意識して、初期の茶山詩における自然描写・風景描写が成立していると判定することは難しい。「出岫」・「倦鳥」が陶淵明の「歸去來辭」に基づくことや、「媚晴漣」は、謝靈運が緑の篠が清らかなさざ波に浸ったり離れたたりして揺れている様子を「媚びる」と表現したのにならって、水路の水面から反射した光が家々の白壁に映ってきらきらと揺らめく様子を「媚びる」と表現した例であるのは明らかであるが、いつれの作品も『文選』以外の書物においても容易に接することのできたであろう、きわめて著名な作品であるからである。ただし、『文選』ということにとらわれなければ、少なくとも陶淵明・謝靈運の作品については、その表現を意識した例が初期茶山詩の自然描写・風景描写にあると指摘はできる。この二人については、「幽境常自慕，遐覽副所耽。直著謝公屐，而却陶令籃」(◆三

月八日、燧嶺、歴柁山及菅山、抵平村、翌日、歴三郎・父石諸村、還安井村、途中作 三首其一)と見えるように、自然との関わりにおいては常に意識される存在であったと考えられ、特に陶淵明について茶山は特別の意識をもっていたらしく、「贈肥後藪子厚三首其三」では陶淵明の詩に見える語彙を多く用いているし、また、「正月五日作」¹⁸⁾という詩では、陶淵明の「遊斜川」を語彙の上でも内容の点からもそのまま祖述したかの趣を呈しており、その詩中には「持杯展陶集，怡然讀且傾」という詩句も見えるのである。

4. 心情を示すもの

心情を示すものに『文選』中の作品の表現を意識したと考えられる例はかなり多い。それも、茶山自身についての心情を示す例よりも、人との関わりにおいてその心情を示す例が多く見られる。しかし、まず、茶山自身についての心情を示す例を一例だけ挙げておく。

『白沙翠竹村舎集』に「三月八日、險燧嶺、歴柁山及菅山、抵平村、翌日、歴三郎・父石諸村、還安井村、途中作 三首」と題する長詩がある。この詩は『黄葉夕陽村舎詩』前編巻二に「山行 三首」と改題されて収録されているが、その第一首の末尾に「暄吹長薇蕨，何必石與甌」という表現があり、隠棲を暗示したと解される詩句である。ここで、この「暄吹」の語は、左思「魏都賦」に「且夫寒谷豐黍，吹律暖之也」とあり、その李善注に「劉逵曰，……，劉向別録曰，鄒衍在燕，有谷地美而寒不生五穀。鄒子居之，吹律温至黍生，今名黍谷」とあるのをふまえた表現と考えられる。茶山は語彙を求めるにおいて『佩文韻府』を参考にしていたらしく、また事実『佩文韻府』によってその出典の確かめられる例は『白沙翠竹村舎集』中の語彙にかなり多いが、この語は『佩文韻府』には見えず、そのことから直接『文選』の「魏都賦」に、注も含めて基づいたものといえるであろう。

続いて、人との関わりにおいてその心情を示す例について、まず一例を挙げる。

「斗酒」 斗酒聊相賀，二秋定豊稔。(◆田家)¹⁹⁾

「古詩十九首 其三」 「斗酒相娛樂，聊厚不爲薄。」

〔五臣(劉良)注〕 人且以相厚爲本，不爲輕薄者也。(『文選』卷29)

陸機「答賈長淵」「遊跨三春，情固二秋。」(『文選』卷24)

この例は、谷川のほとりに住む老人が茶山の所に来て語った言葉という設定になっているが、「斗酒」という語に交情の厚さを暗示させていると思われる。次に、安永九年の京都遊学の際に作られた詩の例を挙げる。

「菅蒯」 諸公幸不捐菅蒯，何吝胸懷一傾瀉。(◇水明樓集，同田子明・葛子琴・岡公翼・笹安道・小西伯熙・今井子原・桑田子重賦。分得夜字。)

任昉「為范尚書讓吏部封侯第一表」「陛下不棄菅蒯，愛同絲麻。」

（『文選』卷38）

この例は、自らをつまらぬものに喩えながら、浪華混沌社の社友の交情に対する思いを述べている。また、一方では自らの思いを述べるに足る友がすぐ近くにいないときに、その寂しさを吐露した例として、以下に二例を挙げる。

「撫琴」 撫琴泣中夜，寂寞峨洋音。（◇雑詩六首其二）

王粲「七哀詩其一」「独夜不能寐，攝衣起撫琴。」（『文選』卷23）

「眼中」 尋山弄水聊消日，眼中寥廓与誰俱。（歳杪示諸友人）²⁰⁾

陸雲「答張士然」「感念桑梓域，髣髴眼中人。」（『文選』卷25）

この「眼中」は「眼中人」の意で、いつも目の中にちらついて忘れられない人、親しい人を意味することは、陸雲の詩によって明らかとなる。これら以外に特定の友人に対して心情を示した例を以下に挙げてみる。

「踟躕」 問余今何如²¹⁾，別来何太癯。欲言淚先下，握手少踟躕。（寄紀州西山子綱）

李陵「與蘇武三首其一」「屏營衢路側，執手野踟躕」（『文選』卷29）

これは、かつてともに勉学に励んだが、別れて以来会うことのなかった友を夢に見ての例である。

「膠漆」 願比膠与漆，幽盟克有終。（夜坐再示伯協）²²⁾

劉峻「広絶交論」「且心同琴瑟，言鬱郁於蘭。道叶膠漆，志婉嬖於墳篋。」

[李善注]道合膠漆，則志 墳篋。蓋言蘭茝墳篋和順之甚也。（『文選』卷55）

「聞無言」 主客聞無言²³⁾，樂意自融、。（夜坐再示伯協）

王粲「登樓賦」「原野聞其無人兮，征夫行而未息。」（『文選』卷11）

これらは茶山の遠縁にあたる医師で、神辺に近い安井村に住んでいた近藤伯協に対するものであるが、親近感、友情の厚さを表現している。

以上、交情という点からいくつかの例を挙げたが、それらは基本的に『文選』中に用いられた意味の範囲を逸脱するものではない。しかし、以下に挙げる例は、茶山が『文選』中の作品に見える語彙を積極的に自身の表現として使用したと考えられるものである。

「論心」 豈無哀絲豪竹興，幾人論心暴脾肝。（今井子原宅集，同葛子琴・笹安道・頼千秋・小西伯熙及桑田子重・藤枝得中・萱雄飛賦。分得韻寒。）²⁴⁾

海内論心屈幾指，雞黍期来千餘里。（至樂居贈長尾公實。分得水字。）²⁵⁾

鴨里笠岡数追隨，論心同凭烏皮几。（◇次韻道光上人呈西山先生）

この「論心」という語は、『文選』中に二例を見いだすことができる。一つは陸機「演連珠」に「撫臆論心，有時而謬」（『文選』巻55）であるが、これは「人の心の測り難いこと」をいうのであるから、ここには当てはまらない。いま一つは沈約の「謝靈運傳論」に「若夫敷枉論心，商榷前藻，工拙之數，如有可言」（『文選』巻50）と見え、五臣（呂延濟）注に「言布襟論心，商榷前人文藻之妙」とある。すなわち、この語は単に心中の思いを論じ合うという意味ではなく、「前人の文藻の妙」を語るに足る人物を対象にする場合に発せられるべきものということになろう。ここでは「幾人論心暴脾肝」の例がややこれに外れると見えるが、これも浪華混沌社の社友を前に発せられたのであるから、一貫した用法と見るべきであろう。

次に、『文選』中の作品の表現をもとにして、茶山が積極的に意味付けをしている例として「款言」を取り上げる。「款言」の例は『白沙翠竹村舎集』中に二例見える。

「款言」 自幸時相見，款言消鄙吝。（◇丙午閏十月訪西山先生得閏字）

徳容忘礼数，款言見操持。（◇次山室先生見寄韻）

この語は、『佩文韻府』に見えず、また、杜甫にもその用例は見いだされない。「款言」という語そのものは『漢書』巻62司馬遷傳に見えるが、そこでの意味は空言であり、ここに当てはめると不自然である。しかし、謝靈運の「酬從弟惠連」（『文選』巻25）の第三章の末尾に「辛勤風波事，款曲洲渚言」とあり、おそらく茶山の「款言」はこれをふまえたものであろう。謝靈運の詩は、從弟の謝惠連と別れて以来、よき便りを待ち望んでいたが、期待のままに詩を送ってくれた、その詩に「風波の災いに苦勞していること、（舟を留めている）洲渚でのことが細々と述べられていた」、という意味合いであるが、茶山はこれをふまえて、「細々と親しく互いの近況を語る」の意味で、「款言」を用いようとしていると考えられる。また、この語が使用された二例の一つが、西山拙齋に関わるものであることも、偶然ではないように思われる。西山拙齋は茶山より十三歳年長で、頼山陽がその「茶山先生行状」に「往来最も密にして、聲氣相い輔くる」と述べたほどの間柄であったから、茶山が互いの友情と親近感を示すために用いた表現といえるであろう。その傍証として、『白沙翠竹村舎集』中の拙齋に関する詩の中には、「臨河無舟楫，况多風波懼」（◇答西山子雅）という詩句があって、これはまさしく謝惠連が謝靈運に送った詩である「西陵遇風獻康樂」の「臨津不得濟，竹楫阻風波。」（『文選』巻25）をふまえた表現であること、及び『白沙翠竹村舎集』に「奉贈西山先生五首」という詩²⁶⁾があって、一首の末尾の句に使用された語を、次の一首の冒頭の句に用いるという、謝靈運の「酬從弟惠連」の連作の構成をそのまま踏襲していることが挙げられよう。なお、もう一つの例の「山室先生」は、天明六年七月に福山藩最初の藩校弘道館の開校にあたって文学教授に抜擢されて學術世話取となった山室如齋と考えられるが、茶山との関係ははっきりしない。しかし、「款言」の語の性格からして、その詩が作られた時にはかなり腹を割って話のできる人物と茶山は考えていたのではなかろうか。

4. 結 語

以上、写本『白沙翠竹村舎集』をもとに、初期の茶山詩について『文選』中の作品の表現との関わりという点において考察を加えてみた。意外であったのは、田園詩人として知られる茶山が、自然描写・風景描写については『文選』中の作品の表現をさほど意識せず、むしろ政治批判につながる表現や心情表現に関して、より意識的に『文選』中の作品の表現から多くを摂取していることである。政治批判につながる表現には「鳥」のイメージをキーにして『文選』中の作品の表現を自己の詩に取り込もうという姿勢がうかがわれる。また、特に心情表現に関しては、より積極的な意味合いを付与しようという意図が見られる「論心」の例や、むしろ造語として考えることのできそうな「款言」の例があることは極めて興味深い。もちろん、こうした例を『文選』だけに限定して考えるのでは、一面的の謗りを免れることはできまい。たとえば、経書類、唐詩や宋詩などについても、語彙方面での関連を探ることは不可欠であろう。また、陶淵明・謝靈運については、一層の考究が必要であると感ずる。しかしながら、初期の茶山の『文選』受容の一端を示すことはできたのではないかと考える。

注

- 1) 写本『白沙翠竹村舎集』の筆跡は、茶山の筆跡ではなく、時に非常に粗雑な誤りも見られ、広島大学の頼棋一教授は茶山が弟子たちを使って筆写させたものであろうと推測しておられる。なお、この写本のコピーを提供して下さった頼棋一教授、そしてこの写本をもとに長期に亘って講読会を主催され、このたびの筆者(谷本)の論文にその資料の利用を許された広島大学の藤井守教授に、この場を借りて心からお礼を申し上げておきたい。
- 2) 岩波書店刊 江戸詩人選集第四巻『菅茶山 六如』解説「六如と茶山」一九九〇年引用中の『前編』とは『黄葉夕陽村舎詩』前編のこと。
- 3) 『黄葉夕陽村舎詩』前編巻2にも収める。
- 4) 『黄葉夕陽村舎詩』前編巻2にも収める。
- 5) 『黄葉夕陽村舎詩』前編巻1に「感事贈拙叟先生」と改題して収める。異同のある句は「賢士固自窮」に改められている。
- 6) 『黄葉夕陽村舎詩』後編巻1に「中秋無月有期不至，賦此代東」と改題して収める。
- 7) 『黄葉夕陽村舎詩』後編巻1にも収める。
- 8) 『黄葉夕陽村舎詩』前編巻2にも収める。
- 9) この詩は「寄肥後藪先生」と改題されて『黄葉夕陽村舎詩』巻1に見えるが、『黄葉夕陽村舎詩』には、其二にあたる詩がなく、『白沙翠竹村舎集』の其一と其三を其一・其二としている。
- 10) 『黄葉夕陽村舎詩』前編巻2にも収める。『黄葉夕陽村舎詩』では、この二句を「所舉非其能，鳥喙寧救飢」に改めている。
- 11) 『黄葉夕陽村舎詩』前編巻1所収。この詩は『白沙翠竹村舎集』にも収められているが、字句にかなりの異同がある。
- 12) 『黄葉夕陽村舎詩』前編巻1にも収める。
- 13) 『黄葉夕陽村舎詩』前編巻1にも収める。
- 14) □□は『白沙翠竹村舎集』の脱字。この詩は『黄葉夕陽村舎詩』前編巻1に見え、そこでは「且紆」に作っている
- 15) この詩は、「山行三首」と改題され、『黄葉夕陽村舎詩』前編巻2に収められている。異同のある部分は

「鹿柴」に改められている。

- 16) 『黄葉夕陽村舎詩』前編巻1にも収める。
- 17) 『黄葉夕陽村舎詩』前編巻3にも収める。
- 18) 『黄葉夕陽村舎詩』後編巻1にも収める。
- 19) この詩は、「雑詩三首」と改題され、『黄葉夕陽村舎詩』前編巻2に収められている。なお、『白沙翠竹村舎集』においては三章構成の体裁をとっているが、『黄葉夕陽村舎詩』では三首の独立した詩を「雑詩」という題でくくる体裁をとっている。しかも、『白沙翠竹村舎集』における第一章にあたる部分が無く、第二章・第三章をそれぞれ其一・其二とし、其三は『白沙翠竹村舎集』に全く見えない詩である。引用部分は『白沙翠竹村舎集』の「田家」では第二章に含まれる二句であり、『黄葉夕陽村舎詩』では其一の中に見出され、異同のある箇所は「今年」に改められている。
- 20) 詩題の「示」を「呈」に改めて『黄葉夕陽村舎詩』後編巻1に収める。異同のある句は「醉月迷花聊取適」に改められている。
- 21) 『黄葉夕陽村舎詩』では「何若」に作る。
- 22) 『黄葉夕陽村舎詩』前編巻2にも収める。
- 23) 『黄葉夕陽村舎詩』では、「無多語」に改められている。
- 24) 『黄葉夕陽村舎詩』前編巻1にも収める。
- 25) 『黄葉夕陽村舎詩』後編巻1にも収める。
- 26) この詩は「感事贈拙壘先生」と改題され推敲を経て『黄葉夕陽村舎詩』前編巻1にも収める。

On Influences of Wên Hsüen on Chazan's early poems.

Kazunori YAMAOKA · Keiji TANIMOTO*

*Faculty of Liberal Arts and Science,
Okayama University of Science,
Ridai-cho 1-1, Okayama 700, Japan*

**Graduate of School,
Hiroshima University,
Hiroshima, Japan*

(Received September 30, 1994)

We have "Koyo sekiyo sonsya shi" as an authorized text of Kan Chazan — one of the Japanese poets in Edo period. In recent years, many selected poems from this text have been published and several interesting studies of this text have been made from new viewpoints.

We have another important text of Kan Chazan's poems — a book titled "Hakusa suichiku sonsya syu," which is found among the Lai's collections of old books in Takehara City in Hiroshima Prefecture. Chazan himself is supposed to have made his followers write this book by hand, and this book also has poems in his early years and they are considered to be the same as poems in "Koyo sekiyo sonsya shi" (Part 1, volume 1-3), which are arranged in chronological order. However, we see a lot of differences in uses of characters and phrases in the poems found in both books, and quite a few poems are only in "Hakusa suichiku sonsya syu," not in "Koyo sekiyo sonsya shi." Therefore, "Hakusa suichiku sonsya syu" is very important in the study of Kan Chazan's poems.

Studies in recent years have shown us that Chazan was a successor to the allegorical poems by Tu Fu or Po chü-i. This is true of Chazan's early poems in "Hakusa suichiku sonsya syu," but I find that he borrowed a lot of phrases or expressions from the works in "Wên hsüen," especially when he meant to criticize politics in those days. I also find that he intended to add new meanings to the borrowed phrases or expressions, especially when he expressed himself to his close friends. My study is based on these early poems in "Hakusa suichiku sonsya syu," and this essay is meant to make clear what acquired from "Wên hsüen."